

実践報告

老人福祉施設での慰問演奏活動に関する一考察

坂井 加奈

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 22 年 12 月 1 日受理)

About Performance Activity for Consolation in Welfare for Elderly People

Kana SAKAI

(Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage)

(Accepted December 1, 2010)

Abstract

The nursery rhymes acquired to the childhood is not only for the children but also for the senior people. Singing songs is considered as a prophylactic measure of dementia. I held some chances to attend the concert with my students in welfare facilities for elderly people. I examined how change they were when they were listening to music. And the questionnaires survey to the staff and the students are summarized in this study.

Key word : welfare facilities for elderly people 老人福祉施設
performance for consolation 慰問演奏
the nursery rhymes 童謡

I. はじめに

著者は学生時代よりアウトリーチ活動に関心があり、普段芸術にふれる機会の少ない市民にも生の音楽を楽しんでもらうため、コンサートホール等だけでなく、街角に出向いての演奏活動（通称『出前コンサート』）を開催してきた。当初はビルの一角や幼稚園、小学校に出向くことが多かったが、昨年より高齢者に向けての演奏会も実施するようになった。

そのきっかけの一つとして、著者自身が祖母の介護に関わり始めたことも挙げられる。どの高齢者も、長い年月を生き抜いてきただけのドラマを持ち合わせており、それだけでも尊敬に値することだと著者は感じている。年を重ねると、できなくなってきたばかりが目につきがちであるが、実際はできることもまだ沢山あるはずである。周囲の人間はそこに注目し、高齢者への尊敬の念を忘れずに接したいものであるし、それが高齢者本人の自信や生きる希望、さらには認知症の予防へと結びつくのではないかと考える。

そこに大きな効能をもたらすのが音楽、とりわけ歌の力であるということについては、昨年度の紀要にて述べた（坂井 2010）。歌は、声を発し体を動かすといった身体的な健康以上の効果をもたらすと考えている。特に、幼少時代に覚えた童謡や唱歌は、いずれ高齢になった時、心の拠り所となり得るのである。老いて記憶が定かでなくなってしまっても、童謡や唱歌が刺激となって、体全体で覚えた原風景を思い起こすことができる。これらは決して子どものためだけのものではなく、高齢者の生きる活力となっていくのである。だからこそ、幼い子ども達に対する童謡の役割は大きく、保育者はそれを教え伝えていく大切な役目を担っているといえる。現在の学生には、それをどの程度認識できているのであろうか。

この研究の目的は大きく2つある。1つは、著者が老人福祉施設に出向き、懐かしい童謡や唱歌を演奏し一緒に歌うという音楽体験を通して、昔を思い出す手助けをしたい、心の落ち着きや自信を提供したいということである。そしてもう1つが、その現場を将来保育者になる学生達にも体験させることによって、幼児期における歌体験がいかに重要かということを再確認してもらうためである。

II. 方法

1. 音楽活動に関する事前調査

今回は県内の施設A、B、Cの計3箇所にて、公演を行った。それぞれ公演日の2週間前には現地を下見し、担当者との打ち合わせの中で、会場の雰囲気や普段の音楽活動についての確認を行った。

【表1】音楽活動に関する事前調査

施設名	A	B	C
ピアノの有無	あり	あり	あり
過去に行われた演奏会	年に1、2回、地元中学校の吹奏楽部が来る	ほとんどないが、近所のハンドベル団体が来たことはある	初めて
日常的に歌っている歌	星影のワルツ・虫のこえ・村祭り・お富さん・籠の鳥・ストトン節・牛若丸・あんたがたどこさ	氷川きよし「ズンドコ節」美空ひばり	ラジオ体操の歌・ふるさと・となりぐみ
みんなで歌ったり、リハビリで音楽を使う頻度	同じ施設内でも、サービス形態によって異なるが、1日1回または、週2~3回は実施されているところが多い。		
音楽をどのような場面で取り入れているか	食事の時、日常的にBGMを流している	・レクレーションの時に歌ったり、ゲームの際にBGMを流している。 ・毎週音楽療法を行い、季節の歌や利用者の好みそうな歌を選んで歌っている。	・朝のラジオ体操を、利用者の方と職員と一緒に歌う。 ・日中BGM（オルゴール、長唄）は常に流れている。 ・送迎中一緒に歌う

2. 公演の活動内容

公演当日は、基本的に著者主導で司会とピアノ演奏を行い、「虫のこえ」や「村祭り」といった一部の曲目のみを学生主導で進行させた。参加学生は、著者担当の卒業課題研究「器楽アンサンブル」のメンバーを中心に有志で募集した。

【表2】公演概要

施設名	A	B	C
公演日時	平成22年 8月23日（月） 14:30~15:30	平成22年 9月16日（木） 14:00~15:00	平成22年 9月22日（水） 14:00~15:00
引率学生	2名	4名	3名
対象者	利用者40名、職員15名	利用者70名、職員15名	利用者65名、職員15名
テーマ	夏～夜空そして秋～	誕生会	四季のうつろい
曲目	手のひらを太陽に、海、われは海の子、椰子の実、ショパン、虫のこえ、村祭り、星に願いを、星影のワルツ、月、荒城の月、箱根八里、ゆりかご、あんたがたどこさ、ふるさと	ハッピーパースデー、月、荒城の月、星影のワルツ、虫のこえ、村祭り、ショパン、赤とんぼ、砂山、春の小川、海、紅葉、川の流れのように、ふるさと	上を向いて歩こう、月、荒城の月、星影のワルツ、虫のこえ、村祭り、ショパン、赤とんぼ、砂山、春の小川、海、紅葉、川の流れのように、ふるさと
工夫点	・オーケンダラム等の打楽器を用いた演出 ・歌に合わせて手指を動かす活動 ・テーマに合わせた衣装チェンジ	・歌に合わせて手指を動かす活動 ・ストーリー仕立てのプログラム ・学生によるナレーション	・歌に合わせて手指を動かす活動 ・利用者への歌詞の配布 ・ストーリー仕立てのプログラム ・学生によるナレーション



【写真1】施設Aにて



【写真2】施設Bにて



【写真3】施設Cにて

III. 結果および考察

今回は、利用者本人へのインタビューが困難であったため、固定ビデオカメラによる撮影を許可して頂いた。さらに付き添いの職員や協力学生に観察を依頼し、終演後アンケート用紙を配布、後日それぞれ回収を行った。

1. 職員による回答

(1) 調査対象

施設A、B、Cの職員計45名

(2) 調査内容

- ① コンサートの満足度について
- ② 利用者の反応がよいと感じた曲

- ③ コンサートの間（または後）
利用者に普段とは違うような変化が見られましたか。

- ④ 利用者の日常生活の中で、「音楽を使ったことで活動がスムーズにできた」等の経験はありますか。
- ⑤ 今回のように、外部から音楽活動に来る場合、どのような内容を望まれますか。

(3) 調査結果

上記の結果を【表3】と以下に示す。尚、全体のアンケート回収率は69%（31件）であった。

- ③ コンサートの間（または後）利用者に普段とは違うような変化が見られましたか？

a. 行動にみられる変化

演奏会の最中

- ・普段歌に加わらない方が、一緒に歌を口ずさまれているのには驚き、嬉しくなりました。[7名]
- ・普段と比べ、手拍子などリズムに乗る方が多くいるように感じた。[7名]
- ・なじみの曲になると、声をだして歌われたり手をたた

【表3】職員対象アンケート調査結果

施設名	A	B	C
アンケート回答人数（回答率 %）	12名 (80%)	10名 (67%)	9名 (60%)
① コンサートの満足度について	よい〔9名〕 まあよい〔3名〕 あまりよくない〔0名〕 よくない〔0名〕	よい〔8名〕 まあよい〔2名〕 あまりよくない〔0名〕 よくない〔0名〕	よい〔8名〕 まあよい〔1名〕 あまりよくない〔0名〕 よくない〔0名〕
② 利用者の反応がよいと感じた曲	手のひらを太陽に〔2名〕 海〔1名〕 われは海の子〔4名〕 椰子の実〔3名〕 ショパン〔1名〕 虫のこえ〔3名〕 村祭り〔3名〕 星に願いを〔0名〕 星影のワルツ〔8名〕 月〔1名〕 荒城の月〔6名〕 箱根八里〔2名〕 ゆりかご— あんたがたどこさーふるさと〔9名〕	ハッピーバースデー〔3名〕 月〔2名〕 荒城の月〔2名〕 星影のワルツ〔7名〕 虫のこえ〔5名〕 村祭り〔4名〕 ショパン〔2名〕 赤とんぼ〔7名〕 砂山〔2名〕 春の小川〔3名〕 海〔2名〕 紅葉〔3名〕 川の流れのように〔6名〕 ふるさと〔2名〕	上を向いて歩こう〔5名〕 月〔1名〕 荒城の月〔1名〕 星影のワルツ〔5名〕 虫のこえ〔3名〕 村祭り〔3名〕 ショパン〔4名〕 赤とんぼ〔1名〕 砂山〔0名〕 春の小川〔0名〕 海〔0名〕 もみじ〔1名〕 さくらさくらー ^一 川の流れのように〔3名〕 ふるさと〔7名〕

※一については、演奏会の中で適宜付け加えたもので、アンケートには予め掲載していなかったものである。

いたり、自発的にされた。[3名]

- ・落ち着きがないご利用者や、普段無表情の方が歌い、手拍子をされていた。[3名]
- ・普段声を出されたり動いたりされる方が、黙ってイスに座り聞いておられる様子には驚きました。
- ・テンポの良い曲（上を向いて歩こう、虫のこえ、村祭り）などは手拍子されながら歌われていた。
- ・耳が不自由な人ばかりだったが、曲にあわせ手拍子をされていた。

演奏会の後

- ・歌が書かれたプリントを持ってきて、暇のあるときは皆さんで歌わっていました。

b. 声・発言にみられる変化

演奏会の最中

- ・声を大きく出していました。[2名]
- ・中には3、4人涙を流しながら聴かれる方もおられ「と

ても感動した、よかった」と喜ばれていました。

- ・「かわいいね」「孫みたいだね」「ピアノは普段使われていないので、先生大変だろうね」と言われた利用者様もおられた。

演奏会の後

- ・コンサート後のお茶会で「上手だった」「きれいだった」「よかった」など自然と利用者さん同士の会話も増え、とてもよい刺激であったと思います。〔2名〕
- ・日頃あまり言葉に出して言われない方から「今日はよかったよ」との声が聞かれた。〔2名〕
- ・帰りの車中で「今日は心が豊かになった」「とっても楽しい誕生会&敬老会だった」と言っていた。
- ・リビングに案内した後も「また行く」と言われ、楽しそうな表情が見られた。

c. 表情・感情にみられる変化

- ・笑顔がとってもみられて良かったと思います。〔10名〕
- ・普段笑顔が見られない方も穏やかそうで、楽しい様子であった。〔6名〕
- ・普段落ち着かれない方も落ち着かれた。〔2名〕
- ・ピアノコンサートなどめったにないことなので、皆さん最初は緊張された様子でした。〔2名〕
- ・ショパンの演奏時は驚き、真剣な表情で集中して見られました。〔2名〕
- ・集中して見られていた時間が長かった。
- ・ピアノ演奏が始まると目がキラキラされた。
- ・利用者の表情も明るく、「ワクワク」されている様子が見られた。
- ・聞いておられる利用者の表情に、うつとりした様子が感じられました。
- ・あまり楽器の演奏など聞く機会が少ないため、普段の行事より集中して参加されていました。

d. 場の雰囲気について

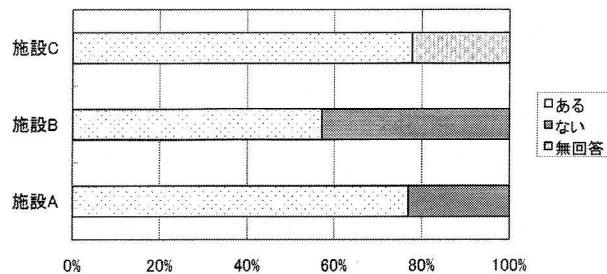
- ・利用者の方になじみのある曲目の演奏ばかりだったので、全体的によい雰囲気だった。
- ・普段歌を歌う際は手拍子だけですが、本日のように生ピアノ演奏だととても迫力があり、よかったと思います。

④ 利用者の日常生活の中で、「音楽を使ったことで活動がスムーズにできた」等の経験はありますか。【図1】

a. 利用者の表情がよくなる

- ・音楽（歌）が好きな利用者様は、歌をうたうと表情が明るく、笑顔になると思います。〔5名〕
- ・不穏になり動き回っていた方が、歌を歌うと自然に落ち着かれた。〔2名〕

④利用者の日常生活の中で、「音楽を使ったことで活動がスムーズにできた」等の経験はありますか。



【図1】

- ・立腹された際には、歌を歌い、気分転換を行っています。〔2名〕
- ・物静かな曲、オルゴールなどはゆったりとした時間作りに欠かせないです。
- ・「まさかこの方が」と思っていた人が、自身の思い出の歌を歌われることがあり、よく接していくうちに出てくることもあります。
- ・音楽をBGMで流すことで、穏やかに過ごせる。(TVをつけた時間が多かったりするので、数時間OFFにして音楽を流すことで)

b. 場の雰囲気作りとして

- ・音楽を流したことでの場が明るく・和やかになった〔2名〕
- ・一緒に手拍子することによりチームワークができたように思う
- ・食事や入浴の案内時に音楽を流し、落ち着いた雰囲気を作っています。

c. 活動がしやすくなる

- ・歌を口ずさみながらだと、歩行中の足取りがよくなったりするように感じます。
- ・トイレに案内をするときに「ももたろう」の歌詞（行きましょう行きましょう、これから鬼の…）に合わせて歌いながら誘導を行う。
- ・ラジオ体操は「覚えていない」と言われますが、音楽を流すと自然と体を動かされます。
- ・リハビリ体操時に歌に会わせた体操を行う際、皆さんご存知の「となり組」や「ももたろう」の歌に合わせて行うと、ほとんどの方は2、3回で覚えられます。
- ・みんなで声を出して歌を歌う若い世代の頃を思い出しながら、少しずつ思い出を話された。
- ・「うさぎとかめ」で肩たたき等、リズムで覚えられるので、あまり説明せず簡単に楽しくできます。

⑤ 今回のように、外部から音楽活動に来る場合、どのような内容を望まれますか。

a. 曲目について

- 利用者が知っている曲（戦後のうた・昭和のうた・季節のうた）を弾いていただき、一緒に歌ったりできるといいと思います。〔8名〕
- ギターやピアノなど色々な楽器を使っての演奏をしてほしい。〔3名〕
- 歌が好きな方でもご自分からは歌詞やフレーズが出てきにくいため、懐かしい歌や音楽を聞くことで自然に口ずさんだりできる機会があればいいなと思いました。
- 事前にリクエストを聞いておけば、よかったです。
- 合間にあと2、3曲クラシックが入っても良かったと思いました。

b. 体を動かすことについて

- できれば今回のように利用者の方も参加できるプログラムが良いと思います。聞くばかりだとウトウトされるので。〔9名〕
- 体を動かすなどの取り組みがあると、私達も日常生活の中で取り入れたりヒントをもらえる。

c. やり方への提案

- 季節、行事（クリスマス）などでまた来てもらいたいと思いました。〔3名〕
- みんなで歌えるように歌詞があれば（童謡・民謡・演歌）
- わかりやすい説明があるといい。
- 一度施設内の雰囲気を知ってからきてほしい。
- 利用者様の中に入ってきて一緒に歌ってもらいたいです。大変喜ばれると思います。
- 利用者の方ともっと「ふれあい」があったらと思いました。コンサート後に利用者の方にもピアノを触ってもらう等。

演奏中、著者は利用者の様子を正面から見ることができないため、1曲ずつ最初に歌ってから弾くという形式をとったが、司会中でも利用者の緊張感や顔のほころぶ様子がありありと伝わってきた。普段の様子を知る職員にとっては、変化はさらに明らかであり、普段落ち着きのない利用者がじっと音楽に耳を傾けていたり、逆に普段無表情の利用者がいきいきと手足を動かされたりする様子に驚きの声が上がっていた。

目に見える反応という点では、やはり利用者自身が昔歌った記憶のある歌の時の方がより顕著であり、普段は無口な利用者からも思い出話等の会話を引き出す糸口となつたようである。反応が目立たない場合でも耳はじっ

と傾けられており、「目には見えなくても、心の中にさざ波が起こっていた」のだと職員は語ってくれた。また公演終了後の活動においても、表情・動作に余韻が残っていることが見受けられ、わずか1時間という時間ではあったが、音楽の持つ力に改めて気付かされたという。

歌には人の心を解きほぐし、素直にする力があるのだろうか。利用者の姿は、子ども相手に歌唱指導している時と見まがうほど、夢中で無邪気であった。しかし職員によると、「このプログラムを毎日行ったとしても同じ効果は出ないかもしれない」との声もあり、美しい衣装や若い学生といった非日常のものに接することで、「自分が特別な場にお呼ばれした」という気分に浸ることができるのだ、という話は大変興味深かった。

とはいっても、職員も経験の中から、利用者との活動において音楽が必須であることを認めており、それはアンケート調査結果からも読み取ることができた。表情・気分を明るくするだけでなく、活動を円滑にする、さらにはチームワークをよくするといった回答は、普段から接している人間でないと得られないようだ。今後の慰問演奏活動では、利用者同士や学生とのコミュニケーションにも重きをおいたプログラムも盛り込みたい。

他者とのコミュニケーションを図ることは、認知症の患者にとって症状の進行を食い止める力となる。近年、音楽療法をリハビリに取り入れる施設が増えてきているが、音楽の力を利用し、外部との交流を常に持つことによって、本人だけでなく介護者をも助けることができるのではないか。高齢化社会に拍車がかかる現代にとって、介護は誰しもが経験するであろう深刻な課題となっており、それに対応できる体制作りが一刻も早く望まれている。コミュニケーションがうまくとれず、介護疲れによる家族の自殺や、ものを言えない高齢者への陰湿な虐待等がはびこっている時代、音楽にはそれらの解決のヒントが隠されているようだ。

2. 学生による回答

(1) 調査対象

西九州大学短期大学部幼稚保育学科表現・音楽コース卒業課題研究「器楽アンサンブル」受講生に声をかけ、それによって集まった有志9名

(2) 調査内容

- 介護施設でボランティア演奏をした経験
- 現在高齢者とふれあう機会はありますか。
- 今までに高齢者と一緒に歌った経験はありますか。
- コンサートに参加してみて、いかがでしたか。
- 歌を教える時、子どもと高齢者とで、「似ている」と思ったところや「ここは違う」と感じたところ。
- 開演前と開演後で、利用者にどのような変化が見られましたか。

- ⑦ 今回の経験は、保育現場で生かせそうですか。
 - ⑧ 今回の演奏会を受けて、幼児にも歌い継ぎたいと思った歌があれば教えて下さい。
 - ⑨ その他
- (3) 調査結果
上記の結果を以下に示す。尚、全体のアンケート回収率は90%であった。

- ① 介護施設でボランティア演奏をした経験
初めて〔7名〕
2~3回〔2名〕
それ以上〔0名〕
- ② 現在高齢者とふれあう機会はありますか。
一緒に住んでいる〔2名〕
月に2~3回〔5名〕
めったにない〔2名〕
- ③ 今までに高齢者と一緒に歌った経験はありますか。
ある〔9名〕
ない〔0名〕
- ④ コンサートに参加してみて、いかがでしたか。
よかったです〔9名〕
よくなかった〔0名〕
- ⑤ 歌を教える時、子どもと高齢者とで、「似ている」と思ったところや「ここは違う」と感じたところ。

似ている

- はっきりゆっくりと話すこと
- 歌ったり楽器を使ったりと一緒に楽しむことができるところ
- 前に立ってみる私達を見ながら動作をされてたり、楽しそうに歌を歌っていらっしゃったところ
- 知っている歌や曲が流れたら、合わせて歌うところ

違う

- 難しい言葉でも理解してくれる
- 言葉がうまく伝わらなかったり、体を動かさないところ
- 子ども達は何度か繰り返して教えるけど、お年寄りの方は知っている歌が多くたつようで、一度教えるとすぐに歌うことができていた

- ⑥ 開演前と開演後で、利用者にどのような変化が見られましたか。
• 開演前は、緊張から表情も硬くなっていたと思います。

〔2名〕

- 自分の知っている曲、懐かしい曲が流れてくると笑顔になり、手拍子をしたり、一緒に歌ったりと和やかになってきたと感じました。声や手拍子も大きくなっていた。〔3名〕
- 1時間の中で特別な気分になっていたのだと思いました。
- 歌の中で大きな声で掛け声される方がいました。
- 特に先生が皆さんに話しかけているときに、笑顔の方がたくさんいました。

- ⑦ 今回の経験は、保育現場で生かせそうですか。

生かせる〔6名〕
生かせない〔0名〕
わからない〔3名〕

- どのように生かせるかはうまく分かりませんが、お年寄りとふれあえたことで、子ども達とのふれあいが深くなるように思います。
- 初めての参加だったので最初はとても緊張していましたが、慣れてくると私自身とても楽しむことができました。自分も楽しみながら参加することで今回のコンサートと同じように保育現場でも子どもたちに楽しむことができると思いました。
- 手の動きを使ったものを歌にあわせるところ。知っている歌に手遊びを入れるときのお話。歌で季節を感じる。

- ⑧ 今回の演奏会を受けて、幼児にも歌い継ぎたいと思った歌があれば教えて下さい。

- ゆりかご〔2名〕
- ふるさと〔2名〕
- 村祭り
- 虫のこえ
- 手のひらを太陽に
- 海
- 月
- 上を向いて歩こう
- 季節のうたは欠かせない
- 日本に昔からある童謡は子ども達にも知ってほしいです。
- 「さくらさくら」は歌詞が2種類あることも含めて、子どもたちにもどっちも知ってもらいたい。

- ⑨ その他

- 初めてのボランティアで緊張しましたが、お年寄りの皆さんが楽しんでいたので、私も楽しむことができました。
- 本当に貴重な経験ができる嬉しく思います。学生があ

と数人いたらもっと楽しく歌い、楽器も使えたと思いました。

- ・初めは緊張していたのですが、時間がたつと慣れて、私達が座っていた場所やピアノの位置と皆さんの席がとても近かったので、どんなふうに聴いておられるのかを見ることができました。先生のカンボジアの話も頷きながら聴いておられて、ピアノと一緒に歌われるので楽しそうでした。
- ・私は祖母と住んでいませんし、アパートは若い人がほとんどなので交流もなく、参加できてよい勉強になりました。
- ・前回に引き続いで今回も参加できてよかったです。人前に出ると緊張し、話したり何か出し物することが苦手です。でも利用者さんの優しく明るい笑顔を見ることがとても幸せに感じ、一緒に素敵なお時間を過ごしているのだと実感できました。
- ・子どもとお年寄りでは同じ部分、違う部分ありますが、元気にいっしょに楽しめるのは同じなのだと思います。

参加した学生は幼児保育学科所属ということもあり、普段は高齢者よりも子どもと接する機会の方が圧倒的に多い。また彼らの家庭環境を見てもわかるように、祖父母と同居している例も少なくなってきたおり、高齢者とはあまり接点がない生活を送っているようである。

以上のような事情もあってか、学生達は最初、利用者の行動一つひとつに戸惑い、表情も硬くなっていた。しかし演奏が始まってからは互いに緊張もほぐれ、徐々に心を解き放つことができたようである。彼らは歌唱指導をする際、おそらく保育現場での習慣なのだろうが、歌い終える毎に利用者に向かって「皆さん、お上手ですね」と声をかけていた。その一言は利用者にとっても非常に意味のあるものであり、褒められることで次の活動の意欲へとつながっていくように感じられた。

また、今回のプログラムには学生の知らない昔の歌も含まれており、そのような歌に限って利用者は大声で張り切って歌う姿があった。学生達は呆然としながらも「自分達の知らない歌を、この利用者達は知っているのだ」と見直すきっかけとなり、利用者にとっても「若い人達の知らない歌を教えてあげよう」と得意げな気持ちを抱き始めたかのように思われた。高齢者が学生に歌を教えるという取り組みは、彼らが「私達にもまだまだ教えられることがある」というやる気と自信につながることを確信できたため、今後プログラムの中に取り入れていきたいと思う。

今回学生達が「歌、とりわけ幼少時代に覚えた童謡は、高齢になった時にこそ生きる糧となりうる」とまで実感できたかどうかは分からぬが、高齢者の変化は彼らの

目からも顕著であり、「音楽は年齢に関係なく人を楽しめることができる」という認識は持てたようである。

IV. まとめ

今回の取り組みを通じ、高齢者にもたらす歌の効能を改めて知り、周囲の人間がどのように取り組んでいくべきかを考えるよい機会となった。学生にとっても、現在学んでいる手遊び歌や童謡が、将来的には高齢者や自分達の老後に役立つことを感じ取ったのではないか。幼児保育を学ぶ彼らに、福祉分野にまで興味を与えるきっかけを与えられたのは大変有益であったと思う。

歌はその時限りのものではなく、いわば一生ものである。今年12月末には、施設Cにて再び公演依頼を頂いたので、今回の研究を活かし、学生と共に実践していきたい。また、童謡や幼児曲の指導に関する、今後の講義の中で役立てたいと考えている。

最後に、今回の調査にご協力頂いた施設A、B、Cの関係者各位および学生に心より謝意を述べたいと思う。

V. 参考文献

1. 大島清：『歌うとなぜ「心と脳」にいいか？』、新講社（2005）
2. 梶田美奈子（こうべ音楽療法研究会）：『季節を歌おう 心ゆたかに音楽療法』、生活ジャーナル（2003）
3. 伊藤秀子・森光弘：『かくて認知症から甦った』、致知11月号、P.22～31（2010）
4. 坂井加奈：『童謡・唱歌の習得に関する研究—学生および高齢者対象アンケート調査にみる現状—』、西九州大学短期大学部紀要、第40号、P.65～70（2010）